

指定年月日 平成19年2月6日

所在地 鎌ヶ谷市東中沢2丁目377-9番地 他

下総小金中野牧跡は、江戸幕府がその軍事力を誇示し、全国支配を継続する一環として軍馬を安定的に確保するために設けた直轄の牧の一つです。小金牧は、慶長年間(1596～1615)に設置され、明治時代初めまで存続しました。高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧の五牧からなり、中野牧は現在の柏市、松戸市、鎌ヶ谷市、白井市、船橋市域に及んでいました。8代将軍吉宗をはじめ歴代将軍の鹿狩りの場になったことや、将軍家等の乗用馬を飼育する施設が設けられるなど、小金五牧の中で最も重要視されていました。

馬の飼育は放し飼いにし、半野生であったため、野馬と呼ばれていました。幕末、小金牧には約1,000頭の野馬がいたといわれています。毎年、3歳馬を捕縛する野馬捕りが行われ、良馬は江戸へ送られました。野馬捕りの様子は名所図絵等に描かれ、江戸からも見物客が訪れる年中行事で、悠然と群れる野馬の姿は、渡辺峯山の「四州真景図 釜原」等に描かれました。

捕込は、野馬捕りを行う施設で、小金五牧の捕込のうち唯一、現存するものです。白子捕込と呼ばれ、元文年間(1736～1741)に込を増設したことが記録に見えます。馬を追い込み捕らえる「捕込」(I)、江戸へ送る馬や農耕馬等として払い下げる馬をとどめて置く「溜込」(II)、若い馬等を野に返す「払込(分込)」(III)の3区画からなっています。

また、IとIIを区画する土手の「口」(木戸)を挟んだ北側(A)及び南側(B)は広くなっており、役人が捕馬を検分した場所で、地元では古くから「御照覧場」と呼ばれています。

各込を区画する土手は、基底部幅8～9.5m、高さ2.5～4mで、寛政期の見取り図に記された数値と現状がほぼ一致することから、本来約7,000mの規模であったと推測されます。

下総小金中野牧跡は、江戸幕府の軍事力を支えた軍馬生産の様相を知る上で重要であることから、牧としては全国で初めて国史跡に指定されました。